

キブツと個人主義日本

手塚信吉

第十二回キブツ研修生選考会

当協会では一九六六年以来、毎年キブツ研修生を全国から募集して、選考の上合格者を国内研修一週間後にグループを結成して、キブツ研修生経験者を世話係として同行、イスラエル国に送っておりますが、どうもいつの研修生の中にも、キブツ研修の趣旨不徹底のまま、参加して現地に行き失望したり、苦情が出たり、批判者に変つたりする人が、二、三名は必ず出て、せっかく熱心にキブツ研修を志す人の迷惑となり、困惑しておりますので、

今回は特に充分に話合つて、理解、納得のいた人だけでグループを結成したいと存じます。

また、特に付言したいことは、当協会のキブツ研修生送りには政治性はありません。単なる文化交流にすぎませんから御了承下さい。

日本という個人主義国に生まれ育ち、個別対立経済社会の闘士である両親の下で、小学生のころから、試験勉強だ、テスト競争だと追い立てられて、出世だ成功だ金儲けだ

と、他人を出し抜くことばかり教えられて、先天的個人主義者に仕上げられている日本の青年男女が、百八十度人生観を転換して、共存、共同、一体化社会であるキブツに研修に行くのであるから、時代に目覚めた青年男女であつても、一抹の不安があります。

よほどの謙虚さがなければ、次元の高いキブツの片鱗にも触れ得ないで終る恐れがあります。神聖な労働を商品化から救い出した意義さえ理解し得ないで終り易い。

本紙で幾度も述べましたが、キブツはイスラエル国と言う資本主義国で矛盾なく健全に発展している共同体社会であるところに着目して、その思想精神を日本社会に取り入れて、行詰つた零細個人農業や、中小企業の合同化



第12回選考会審査員一同

や共同化促進に役立てたいと考えたのが、我々のキブツ運動であります。

そのキブツ運動も十年あまりになりますが、大人の世代で理解する人は非常に少ないのみでなく、今日でも、まだ、誤解したり警戒したり、そんな理想社会が永続するはずがないなどと言って信用しないものが多いのであります。そんな人々に弁解したり、反駁したりするよりも、歴史という公正な行司の裁きを待つ方が賢明であろうと存じます。

キブツの研修に行くものが個人主義者で、己れの利害得失に拘泥していたらナンセンス

であるが、そんな青年が存外多いのです。他人の幸せを喜ぶ心がなければキブツは成立しません。キブツ研修生が、グループを結成して、共同生活をうまくやることもキブツの研修であって、それに失敗するようでは、キブツ研修そのものも失敗であります。この点も選考会で充分話し合い度いと存じます。

そんな愚かな奪い合いを、日本人は何百年来、繰返しながら来た目覚めない大人たちであります。キブツ研修を志すほどの皆さんは、この愚かな歴史の繰返しに終始符を打つ勇士になつて貰い度いのであります。

個人主義日本人がキブツを理解することは非常に難しい

個人の尊重が個人主義の本質であるから、個人主義そのものが悪いとは言えない、お互に個人を尊重し合えば、共同体にも通用するが、利己心に結び付いた個人主義は悪に変わ

る。今の日本の個人主義は、その利己心に結合した個人主義であるから、おそろしく人間社会を不安定なものにしている。

世界情勢からみても、人口の激増、地球資源の枯渇、絶対食料の不足、等々からみても個人主義や個別対立経済のような、無駄の多い不平等社会は許されない時代となった。

もちろん、個人主義にせよ、資本主義にせよ、人間社会の必要から生じた秩序であつて、その恩恵に浴してきた明治以来の日本人の心奥に焼付いて放れ難いものであろうが、最早そんな経済秩序は、老後の備えにも、子孫の幸福にもつながらないものになつていく。

テンポの早い経済変動は、定期預金にせよ、信託投資にせよ、養老保険にせよ、二十年、三十年先の安定に役立たなくなつていく。今の一万円札の購売力を目安に、二十年先、三十年先の老後に備えて貯金もする。養老保険にも加入する、私財の蓄積に余念がない日本人をみると哀れである。

第一次世界大戦後のドイツでは、インフレーションが激化して、一億マルクが一レンデマルクになつてしまつた。日本でも昭和四年、玄米一俵五円であつたが、三十年後の今日では一万円である。貯金の貨幣価値は二分の一である。複利加算があるにしても、勤労貯蓄で追いつく経済ではない。

昭和五年ころの中堅社員の月給は三十円であつた。結婚して子供でもできると、誰でも一口二千元ぐらゐの養老保険に加入したが、月掛保険料三円五十銭は頭痛の種であつた。さて、満期が昭和三十年、保険金二千元は西瓜二個の代金に過ぎなかつた。生命保険会社とは公認された詐欺機関と言つても過言ではあるまい。

具体的な悲劇を供養のために書き加える。我社に勤勉実質な模範社員の今井清二君がいた。勤労貯蓄の第一人者で、酒も煙草も謹んで、定年退職時には、退職金五千五百円も加えて三万円の金持ちになつていた。

当時の三万円は大したもの、定期預金にして利子手取りが年に千六百円あつた。それは課長級高給社員の年収以上であつた。彼は幸福感一パイで、老婆と共に故郷千葉県下に隠居の身となつた。それから十年の歳月は流れた。三万円の定期預金は半年分の米代にも足らなくなつた。

そして、乱世に耐えかねて、世を憐んで死をえらんだのが昭和二十六年末であつた。力と頼む実子は支那事変で戦死している。真面目人間ほど犠牲の多い資本主義日本である。

今の日本の政治力には、貨幣価値安定の力量もないし、そんな誠意もない。従つて、二

十年、三十年後の貨幣価値など計りようがない。政府にしても、銀行や保険会社にしても、良心があれば、貯蓄奨励も保険勧誘も出来なはず。だが、そんな良心もないし、国民大衆もまた呑気なもので、目先の欲は深い、二十年、三十年後のことは他人ごとと感じて、現実感がわかない。個人主義の特長である。

日本の競馬人口五千万人、東京競馬の一日の馬券売り上げ十六億円、十万観衆の中で儲ける奴は5%もないが、個人主義人間の特長として、自分に必ず当るとみんな思い込んでいく。九五%の丸損で大衆の悲喜劇は、何千家族にも及んで、一家の離散、心中沙汰、夫婦別れ、子殺し、親殺し、最限のない不幸の種蒔きとなる。利己心と己惚れ心が結合して、一儲けの夢をみる亡国の民が激増するばかり、一万円札がパン一片の代価となるまで個人主義大衆は激増の一途を辿るであらう。

文化国家だ。福祉国家だと標ぼうしても、老病死者に泣く落伍者二千万人、寝たきり老人、五十万人、国の責任であるはずの、戦争犠牲者が大半であるという。今の日本は、隅々まで、個人主義者、個別対立経済の闘士で充満しているが、他人を押しつけて億万長者となつたとしても、二十年先、三十年先の保

証とならないことは前述の通りである。
老病死苦も、インフレ経済も、貨幣紙屑化
も、何の不安も、不幸もない安全対策がある

一般大衆ほど個人主義者が

多い、だから弱いのだ

とすれば、それはキブツ共同体あるのみ、皆
さんのキブツ研修の意義はそこにある。

毎回キブツ研修生募集にあたり「私はなぜ
キブツに行きたいか」という論文を求めている
が、今回の論文中にも、優れたものが少なく
ない。その中で、外間五郎君（十九才）の論
文は、文章としては素朴なものであるが、真
実味があり、心打たれるものがあつた。それ

に外間五郎君一家の境遇や家族構成が、私の
少年時代の境遇そっくりであつたので、一層
感激の涙で幾度も眼鏡を、くもらせて読了し
たのであつた。参考の為、原文のまま左に掲
載することにした。

もう一度原点から自分を形成したい

外間 五郎

私は沖縄本島北部の国頭村で生まれ、七才
までそこで育てられました。小学校に入つ
て間もなく、政府の大きな奨励もあつて、南
米移住がさかんになり、私の家族もブラジル

に移住することになり、村の小学校とも別れ
ることになりました。
太平洋からパナマを渡り、大西洋に出て、
新天地ブラジルの最初の移住地は町外れの荒

地でした。父と当時十七才の長男、修兄さん
は毎日畑作りに懸命でした。やつとできた畑
で野菜作りから生活がはじまつたのです。小
さな荷車一杯に野菜を積んで、全く言葉のわ
からない母は、私を連れて毎日のように町に
出たものでした。

やがて子供たちが言葉も判るようになると、
別の土地に移ることになった。その新しい土
地は山に囲まれたへんびなところでした。電
気も水道もありませんし、町に出る道もある
にはあつたが、傾斜三十度の悪路で、雨が降
るとトラックの通行もできませんが、農業に
は黒土の肥えた土壌で、干魃の多いブラジル
でも水も豊かな好条件の場所でした。

この恵まれた土地、さらに、隔週毎に町の
主要道路で開かれるフェイラという市場に、
六つの自分たちの店を得たことで、収入もそ
れまでの三〜四倍にもなり、我々男五人の成
長を考えると将来は明るいものでした。

しかし、父が最も期待していた我々の成長
が、やがて大きな障害となり、日本に引返す
原因になったのです。まず、長男の修兄さん
が、父と対立したのです。対立といつて
も、兄さんが、ただ口をきかなくなつたので
すが、それが無言の抵抗だったのでしよう。

県立工業高校に合格しながら、ブラジル行き
のため中絶して、空しく四年間ただ働きした
兄さんの小さな反抗だったので。

兄さんは金の話が嫌いでした。我々弟が金
の話などすると、子供のくせに金、金となん
だ、とよくおこりました。要するに兄さんは
金儲けばかり考えて、子供の教育というもの
を考えない父のやり方に反発していたのだろ
うと思います。

しかし、兄さんもこの矛盾を知っていて、
直接口に出さなかつたので、我々の教育と農
業は両立しませんでした。我々に満足な教育
をさせようと思うと、たちまち労働力がなく
なり、農業は成立しません。そうかといつて
言葉も知らない、金もない外国で農業を止め
るわけにはいきません。

結局、兄さん以上に、我々の教育を考えて
いた父は、我々の成長が早ければ早いほど、
早く日本に引上げなければならなくなつたの
です。

かくて、丁度五年目に当る去る四十年六月、
親戚たちの反対を後にブラジルを去つたので
す。その時、長男二十二才、次男十九才、三
男十七才、四男十四才、私が十二才、妹が十
才と二才でした。

あれから六年十ヶ月、地球の裏表という以
上に異つた、日本の社会にすぐ放り出されて
想像以上に苦しかったであらう兄さんたちと
は反対に、私は何の苦勞もなく、今年の三月
高校を卒業したのです。
そして、今春大学受験に失敗した。自分自
身を見つめながら、こうした父や母や兄さん
たちの過去、現在を考えると、私は自分に対
してやり切れないものを感じるのです。

この目まぐるしい日本の社会で、中学や小
学校さえも出ていない兄さんたちの、とにか
く精一パイやってきた姿や、どうにか生きる
糧になるようなものを得ようと、国語辞典を
引きながら本に読み入っている姿をみると「
どうにかなるだろうよ」といったような、生
きることに對する自分のいいかげんな態度に、
また色々な面で止むを得なかつたにせよ、自
分というものを犠牲にしてきた兄さんたちと
は対照的な「俺は自分のやりたいようにする
さ」といった自己中心的な自分に、一種の自
己嫌悪を感じるのです。

中学、高校と六年間の教育を受けることが
でき、最も恵まれていたはずの私が、いま一
番曖昧な人間になろうとしてゐる。生来の意
志薄弱な性格もその一因であらう。しかし考

えてみると、この六年間、特に高校における
三年間、私の受けた教育というものは、自己
形成、人間形成のためのものでなく、テスト
や受験のための、知識の詰め込みにすぎませ
んでした。

私は素朴な気持から、確かな一個人の人格に
なりたいたい。生きることを真剣に考えたいと思
つてゐます。そのためにも今の自分を打ち砕
き、いま一度、ゼロから自分の再形成をしな
くてはなりません。

私は今、予備校をやめ会社に勤めています。
自分は未だ若い、大学なら二〜三年後でも行
ける。しかし、いま自分を真剣に考えないと、
自分は一生曖昧な人間として終つてしまふ。
まず実社会に出て、自分を鍛えなおすのだ！
そう思ったからです。

友人の中には、まず大学に入って、そつう
うことは、それから考えればいいじゃないか
と言う者もありました。もつともな意見です
が、マンモス化、レジャー産業化しつつある
現在の大学で、前に述べたように、意志薄弱
な私など、すぐその流れに押し流されてしま
うでしょう。

しかし、そうは言つても、実社会に出てみ
ると、利潤だけを考える会社にあつて、仕事

の中に生きる喜びを見出すというより、物質的な満足を得るための手段として、働いている人々の中で私には何も得るものがありませぬ。そこで、私はキブツに行こうと決めたのです。

私がキブツに行きたい主な理由は、もう一度原点から自分を形成したいからであり、その場として、かつて兄さんたちがブラジルから日本を、その場としたように、イスラエルという外国の協同体の中に自分をおいてみるのが、最適ではないかと判断したからであります。

この論文は、真実そのものを感じ、今の日本社会の一断面を画き、あらゆる面から示唆を与えてくれる。貧困一家の苦難の中に、計り知れない家族愛が滲みでている。

十七才を頭に幼子七人連れて、波頭万里を越えて地球の裏側に移民行、悲壮な決意であったであろう、父親の心情がわかり過ぎるほど判る。何とかして貧農の境涯から脱出したかったであろう。

今の大学は、一生を曖昧な人間に終らせるためのものにすぎない」と、そこに気付いたのはさすがに偉い。いくら日本でも、そんな出鱈目大学の存在は許さなくなるであろうし、大学が人生の登龍門であった時代はもう終わっている。

自分だけ出世しよう、自分だけ金持ちになろう、自分だけ割り良く暮そう、そんな対立や競争を止めない限り、人間社会は永久に救われぬであろう。ところが貧乏すればするほど、今にみておれとなり易く、他人を出し抜く気風が一層強烈になり易い。それでは人間社会に平和も安泰も永久にないであろう。

どこの国でも、国民の大半は貧困不満階級であるから、その貧困階級が、平等社会の実現を本当に望めば、一回の総選挙で改められるであろうが、決して改められない。ばらばらの個人主義こそ、貧乏や不幸の因果の種なのである。

毛利元就の遺訓として有名な、一本の矢は弱いが三五本を一束にすると絶対に折れない。兄弟が一束になっている限り毛利家は安泰だぞ、と教えている。集まれば何でも強くなる。よく心境農産の尾崎さんが、人間は共同せにやあかん。丸裸の労働者でも百人共同

それにしても捨子同様の移民行政が腹立たしい。それに比べて、あの小国イスラエル政府の移民受入体制の至れり尽くせりの、愛の政治に感心する。年間六万から七万人の、丸裸で移入して来る世界各国からのユダヤ人に、家を与え、職を与え、国語を教え、数年後には安定生活が可能になるのだ。日本は輸出移民であるが、一ヶ年せいぜい五千人程度、捨子移民の無情さは残念である。

それにしても、父親の願いは、貧しいながらも健康な男兄弟六人もある、協力して二十年辛抱すれば、一大農場主も夢ではない何も学歴ばかりが能ではない。独学で大成した人は昔から無数にある。世界的発明や大発見は、殆んど独学者のものであった。と自らを慰めて移民を決意したのであろう。

年代が違えば考え方も違う。長男、修君の心情も理解できる。日本の子供の九〇％は高等学校に進学している。さらに、その三〇％は大学に進学する時代に、中学校さえ進学できない弟たちの現状を考えると、人間失格と想うのも無理ではない。

学歴尊重の風潮が根強い日本では、上級学校入りが出世街道にみえる、若者が憧れる学歴癖を責める気はないが、恩愛に負けて日本

生活をすれば、貧乏神は忽ち縁切りになれる。金だつて同じや、一円玉一個では子供だつて見向きもしない。だが百個集めると百円になって、軽食ぐらいありつける。一億集つたら事業も興せる、と言っていた。

本当に、心境農産は戦後丸裸の失業者が集まって、協同協力の力で日本一の畳床製造工場になったのである。イスラエルのキブツも、共同化したから強くなったのであり、その共同体の在り方が、注目に価するのである。

キブツで学びたいこと二点

杉本 静子

キブツにおいて、私が真に体験したいと望んでいることは次の点である。まず第一に、婦人の労働問題と、女性の生き方についてである。我が国では、男女平等だと憲法に謳われていても、女性としての価値観は、はるかに低いことを痛いほど感じる。その証拠に、女性が、ある時期まで男性と同じように職場で働いたにしても、また、大衆の面前で自分の言いたいことを述べられる機会があるにし

に逆戻りした五郎君の父親の心情が痛いほどわかる。

日本人の学歴病は病い膏肓に入り、救い難い幣害となっている。それが試験勉強となり、テスト競争となり、人間性さえ傷つけがちであり、実に出世競争に、金儲け競争に手段を選ばず、対立競争に終始し、日本人全体が潤いのない人間化している。

こうした競争心や対立意識が、日本社会の進歩発展に役立つことも事実であるが、その損失も莫大なものであった。何よりも大きな損失は、極端な不平等社会そのものにある。こんな不健全社会を放任すれば、社会不安は増すばかりであろう。

さて、五郎君が中学、高校と六年間に受けた教育は、自己形成、人間形成のためのものでない。テストや受験のための知識の詰め込みにすぎませんでしたと告白しているが、実は、心ある今の学生諸君共通の述懐であろう。また、「私は素朴な気持ちから、確かな一個人の人格になりたいし、生きると言うことを真剣に考えたい。その為にも今の自分を打ち砕き、今一度ゼロから自分を再形成したい」とも告白している。

そして「マンモス化、レジャー産業化した

キブツは人間平等観と労働尊重とを主柱とし、搾取も不労所得もない共同一体化社会であり、各自がその能力に応じて働き、必要に応じて分配を受け、老病死苦に不安もなく、一人の落伍者もない。

金儲け競争に浮身をやつし、奪つたり奪われたり、泣いたり恨んだり喧嘩をしたり、それで蛇蜂取らずで一生を終る。それに気付いてキブツ研修生を決意した外間青年に祝福を捧げたい。

でも、いざ家庭生活が営まれると、結婚を境にして育児と食事のために、そして掃除、洗濯というものが婦人の仕事として切り変わってしまう。私はそれが虚しくてならない。女性は女としての宿命があるにしても、女性も一個人の人間として、結婚後も働きつつ生きて行きたいという、欲望をおさえて生きることに、私は納得できません。夫や子供と共に、結婚しても働ける社会があるなら、というよりも

そのような農業社会が創れたならば、どんなに理想的だろうと思う。やりたくても、文化面にまで手の出ない現状からみると、キブツはまるで夢のような気がするのである。

第二に、**これからの農業は個人経営では、もうすぐ限界に達する**、ということである。換言すれば、**個人経営ではやっつけて行けない状態に達している**と言っても過言ではない気がする。共同経営や共同作業の必要性に迫られず、すでにそのような形態に踏み切っている部落や地域が多くなったが、なぜか長続きしないのは、どこかに欠陥があるに違いない。かろうじて保つ共同ではなく、安心して農業の共同ができる人間関係が必要だと思ふ。

現在の農業の共同形態には、いつか行詰る時がくるという気がする。私自身、幼いころから共同精神を養ってきたとは言えない。何かしら行きづまりを感じる為、何とかしなければと焦りが湧く。その迷っている私にとって、実際に試みられているキブツでの生活を体験して、それを支えている精神を学びとりたい。

第三に、**子供の養と共に後継者の問題である**。私は女であるが、家庭の事情と、牛飼いの好きなことが相まって、現在酪農に携わ

ことを、キブツで体験し、目覚めた人からキブツに移行する外はありません。正しくキブツをみてかえり、同志と共に最善を尽くすより外はありません。

第三の問題も、第二の問題に関連する。今の非効率な、百年も時代おくれの零細個人百姓に後継者などあるわけがない。あるように見えるが、それは農業の後継者でなく、値上りした土地の後継者であって、むしろ農業は邪魔物なのである。

世界的に食料不足が騒がれる時代がきた。一億一千万人口を抱えて、自給食料五十%弱国民の生命を輸入食料に依存して、平気でいられる島国日本の政治家、正に偉大なる肝つ玉かなである。だが、日本は活殺自在の権をアメリカに握られた経済属国にすぎない。

主権在民、民主主義日本、三十七万平方キロの国土は日本国民のものである。そして、農耕地として利用可能な土地は一千万ヘクタール現存する。これを有効適切に活用すれば、幸い世界にも稀れな温暖多雨国であり、人口が一億五千万人になっても、自給自足も不可能ではないという。

そんな土地を持ちながら、およそ時代逆行の零細個人農家を奨励するために、既存農地

っているが、後継者問題が悩みのタネである。このことに関して、キブツではどうなのであるか。私も理想を求めて働くことの尊厳意識を、自然環境の中で生きる姿を通して、やがて生まれ出るであろう子供に教えたいと思ふ。そして、次の世代の青年たちが、農業で生きていくことが、最もふさわしいのだと思えるようなことを、日常の体験の中から、子供が発見できるような機会を施せば、これに勝るものはないと思う。そのような子供に接する親の考え方を、キブツの精神から学び取りたいと期待する。

人間に生まれて、人間にふさわしい心を持つて、生きて行ける社会があるとしたら、自然との対話が根底にある農業にしか求められない気がする。先に触れた婦人の生き方にせよ、共同経営の源となる共同精神にせよ、次の世代の子供の養にせよ、すべて単独行為では成就し得ないものである。我々が、共同の精神を、貴重な文化や労働を通じて体験し、農業を核として展開されるべきだと思ふ。

キブツに行つて来た人の話や、スライドによって、またキブツについての書物に触れるたびに、キブツで試みられている共同生活や物の考え方を、肌で体験したいと痛切に思う

六百万ヘクタールを何千万分にも切りきざんで私有せしめ、非効率、不採算、何を作っても世界相場の二倍三倍、特別保護なしでは一粒の米もとれない農業になってしまった。

そして、農家も田作りより金作りに夢中であり、大小成金続出し、億万長者が軒を並べ有頂点になっている間に、輸入食料依存度が五十%を越えてしまった。保護政策なしでは日本農業全滅の惨状を呈している。

我々の大学時代は、いわゆる大学闘争の激しい時でした。やれ国家権力との戦い、革命などと唱えられるのが日常性でした。しかし私にはどうしてもついて行けないものがあつた。そんな事に青春の情熱を真剣に傾けている者もいたが、言行不一致をうそぶいている者もかなりいたと思ふ。

こうした時代のせいもあるが、少々社会科学関係の本も読んでみたが、門外漢の私には社会主義国家という概念を取り上げても、言

のである。

この論文は今の日本の農村に住み、農業を営んでいる女性でなければ書けない文章である。実感が真にせまる思いであり、行詰りつつある農村の暗影が見えるようだ。第一の問題は「**キブツは婦人開放の所産である**」と言われておるように、婦人の労働問題も、育児家事問題も、最も賢明に解決済みであり、この一点だけでもキブツ研修の価値を充分認められるであろう。

第二の問題「**これからの農業は個人経営ではやっつけて行けない**」その通りであり、日本のような零細個人農家など農業の名に値いしない厄介者なのです。共同化、共同作業が永続きしないことも指摘されてあるが、キブツは利己心の一かけらでもあれば成立しない。個人主義日本の農村は、利己心の塊りのような存在ですから、結局、行詰るだけ行詰つてしまふまで共同化も共同化も駄目でしょう。

共同化して近代化農業経営に移行すると、能率は何十倍化し、文化農村の夢も実現する

呑気な政府も国民も、この実状を他人事のように考えて気にもとめていない。こんな亡国風潮の真只中で、杉本静子さんのような、憂国の女丈夫があることは力強い限りである。

イスラエル国の土地制度なども、永久不変の真理に基づくものであって、そのまま日本の参考にならう。謙虚になつて研修すればキブツに学ぶことはいくらでもある。

海外進出にキブツ思想が必要

小川 純生

葉だけが先にきて、実際のイメージがはつきりしない。

つまり、社会主義国家＝資本主義の社会に生ずる階級的差別や不平等をなくし、生産手段の私有をやめ、共有化して計画的な経済を行つている国家というような辞書にのつていような通り一遍の事は言えるが、その本質、つまり、差別や不平等をなくす手段を実際どのように保証しているのか、人間の能力差をどのように区別しているのか、また、自由の

保証ほどの程度か、などについては、あまりよく知られていない。

この事はソ連や中国の内幕について、いかに無知であるかを考えれば、あきらみかです。このように、社会主義という、我々とは異なる社会体制に対するイメージは、実に曖昧である。

この点、人間平等観と労働尊重を基盤に、搾取がなく、物的報酬がすべて平等に支払われるキブツは、理想社会主義の思想に近いと聞きます。この社会学的にみて、ユニークな組織で、異なる社会体制を実際にこの目で見て、この体で感じてきたい。これが最初の、そして、最大の理由です。

次にキブツでは、共産制の原理が教育にも拡張して、独特の集団教育をしていると聞きますが、一応、教育の資格をとった者として、この点にも関心があります。

大学で物理を勉強した者ですから、ほとんど農業とは関係がない。友人の就職先をみても私の場合も、たぶんそうした方面の会社に入るだろう。将来の夢は、国際的なエンジニアになることです。もし可能ならば、夜間の大学で哲学関係の勉強をしたく思っています。

世界が、ますます国際化していく現在、日本の企業も単純に企業の利益のため、外貨獲得のために海外進出すれば、これは海外侵略にほかならない。

むしろ、その国の発達と国民の幸福を進める形での調和のとれた海外進出しかあり得ないと考える。こうした社会状態で、キブツでは二次、三次産業と農業との調和をどう考えているでしょう。

日本のように、食料の多くを輸入にたより、農業が、資本主義経済から脱落して、国家の保護で、かろうじて命脈を保っている状態は非常に問題であると思う。

こうならないため、キブツでは農業と他産業の関係はどう考えているであろう。

この小川君の論文を読んで、考えさせられました。「差別や不平等をなくす手段を、どのように保証しているか」「人間の能力差をどのように区別しているか」「自由の保証ほどの程度か」この三点も現地に行けば判るであろうが、判ることと理解することは大分

違うと思うので一言だけ申上げておきたい。個人主義、利潤追求社会日本の常識を百八十度転換してキブツを見せんと、いくら体験してもキブツの真価はわかりません。

労働を売買する日本の労働は一種の商品にすぎないが、労働を神聖な奉仕とするキブツでは、代償を考えない。只で働く意義を理解することも、キブツ研修の一つであります。

「物的報酬がすべて平等に支払われるキブツ」の一句があるが、キブツでは労働に報酬は考えていない。賃金で売り切る労働の空しさを知るのもキブツ研修の一つですが、謙虚を忘れては何も見えませぬ。

小川君が指摘する「日本の企業も単純に利益追求、外貨獲得のために海外進出すれば、これは海外侵略にほかならない」「今度はその国の発達と、その国民の幸福を進める形の調和のある海外進出しかあり得ないと考える」という、正に素晴らしい意見である。日本の海外進出は、その性格を転換しないと、八方ふさがり総スカンを食らうであろう。

すでに、タイでもシンガポールでも、一触即発の危機をはらんでいる。後進国に臨む場合、キブツの思想精神である人間平等観に徹して謙虚でなければならぬ。

再建イスラエルの国是として、農業を民族の温床と考へており、今もなお、砂漠の開拓に力を入れているが、徹底した近代化、機械化農業であるから、キブツのような大企業農

キブツでしか学べないものを

学びたい

小林悦子

キブツについての知識を初めて得たのは、高校生のころでしたが、自ら進んでキブツについて勉強しようと思っただけで、大学に入學し、専門である発達心理学の授業で、キブツ

の特色ある教育方法を知ってからです。NHKの「幼児教育」という番組の中で紹介されたキブツの生活や教育も興味深いものでした。文献としては、山根常男氏の「キブツ」(誠信書房)篠原睦治氏の「キブツの子供達」I・ドイッチャーの「非ユダヤ的ユダヤ人」[パレスチナ問題](亜紀書房)など

で、イスラエルの国家や国民、アラブ問題、キブツの生活、思想などを、自分なりに勉強してきたつもりです。月刊キブツも、知人から二冊送ってもらい、日本におけるキブツ活

動も知りました。

将来、教育者になるための養成学校に学ぶものにとつて、キブツの集団主義教育を自分の目でみる事ができれば、本の中では得られない勉強になると思いますし、イスラエルの人々と共に生活できることは、日本では味わえないものでしょう。日本では体験できない集団生活ができることは、私自身の人格形成にとつても好ましく、価値あるものだと思います。

大学のサークルは、ワングラフオーゲル部で、野や山をよく歩きますから、イスラエルの自然の中で、人々と共に働き暮せることは大きな魅力です。

学業の途中ではありますが、今の時期に日本を出て、違った世界を知ること、やれるだけやってみようという自分の気持ちを大切にしたいと思います。幸い、担任教授も賛成してくれましたし、両親の許可も得られましたので、キブツでしか学べないものを十分に吸収したいと思っています。 中略

小林さんの論文は、もっと長文であったが紙面の都合で要点だけとした。北海道教育大には、キブツ研究の大先輩、草刈、奈良、大野、三教授がいる関係もあって、一九六六年以来、数十名の同大学卒業生、または学生が、キブツ研修生として、イスラエルの大地を踏んでいるので、北海道こそ新しい教育の実を結ぶ日もあろうと期待しています。

だが、救い難い個人主義日本人の頭にキブツ思想を浸入させることの困難さは想像以上のものがある。排他利己心の餌食にされている子供たちを救い出す仕事、教育家の任務ではなからうか。幼稚園児のころから、良い中学、良い大学と試験勉強、テスト競争に

かり立てる。僕も人格形成もあつたものでなく、他人を蹴落すことばかり考えて、青少年期を終始する。出世主義、成功主義、金儲け主義に無我夢中、親に劣らない利己心一天張りのコチコチ人間に出来上るであらう。潤いも情操もない、奪い合い殺し合いの人間社会で、一人の成功者に千人の敗残者、世知辛い世の中として締めても、己れの利己心を反省する大人は殆んど稀れである。青年男

日本にキブツ村を作り度い

私がキブツを知ったのは、同じ会社に月刊キブツを購入していた、矢野英男さんがいてキブツについて色々聞かされました。その月刊キブツをみると「搾取も不勞所得もない、皆労働社会で、人間平等観と労働尊重を主柱とした一体化社会」とあるのが目に入りました。しかし、その時は、いまの日本のような資本主義国で、物質文化に酔いしれている日本人がキブツのような共同体社会を受入れる

女の中にキブツに憧れを持つものが、増加しつつあることは、せめてもの救いである。人間平等観と労働尊重とを主柱として、搾取も不勞所得もない共存共同一体化社会、労働を賃金の奴隷から救い出して人間的良心に結合せしめたキブツは、個人主義日本人の活路ともなろう。「キブツにしかないもの」それが只で働く労働の意義であらう。

市川 正善

であろうかと首をひねりました。矢野さんは高知県の貧農の家に生まれたせいか、日ごろ口ぐせのように、「今の日本農業のような、三ちゃん農業、出稼ぎ農民の現状を根本的に改革しなければ、これからの日本農業は駄目になる。そのためには、イスラエルのキブツや中国の人民公社の思想を取入れなければならぬ」と言っていた。私も同感であり二人でよく話合いました。

今の日本人は自由主義をはきちがえて、あまりにも利己主義的であり、己れのまわりに垣を造ってしまい、意志の疎通もなく、楽しい語らもなく、協調性に欠け、バラバラに生きていて、相互扶助が足りない。

矢野さんも私も貧乏家庭の生れで、人間の弱さ醜さが分かりますので、二人で話合っている内に、日本にもキブツ社会が必要であり、キブツは日本社会のどうあるべきかを教えていると話合いました。

それは、イスラエルという資本主義国でありながら、共産主義の理想を取入れているキブツは注目に価するものがある。現在の地球上では、未だ共産主義国家は存在せず、社会主義の段階がせいぜいの国々が多い中で、キブツの社会体制は原理的な深さを感じます。

矢野さんは、私より一足先に一昨年キブツに行きました。私も矢野さんとの約束で、日本にキブツに似た社会を作ろうと考えますので、今回は是非キブツに行きたいと存じます。月刊キブツが指摘するように、個人主義で利己心に支配され、出世主義、成功主義、金儲け主義で、奪い合い殺し合いの社会では、日本人はいつまでたっても、心の安定も人間性の回復もあり得ず、国家永遠の安泰もあり

得ません。その日本の病根を絶つ思想精神を、キブツ社会の在り方の中から学び取りたいと考えております。

この市川君の論文をみると、月刊キブツの読者の声という親しみを感じます。これまでの月刊キブツの読者は多数イスラエルに参りましたが、その中には実際のキブツを体験して何だこんなものか、月刊キブツに騙されたとか抗議の手紙を受けたこともある。だが、キブツを誇張して書いたことも、美辞麗句で飾り立てたこともない。また、そんな必要もないのです。只、人生観が違えばキブツは見えないのです。

虎を猫と間違える人もあるし、その逆の人もある。西行法師が只の乞食坊主にみられた逸話も沢山ある。偉大なものほど却って平凡にみえるもの。キブツだって見る力がなければ只の農業にしかみえません。

また、月刊キブツは、キブツの原理や理想を説いているのであって、個々のキブツには波乱もあらう、浮沈もあらう、キブツ生活に

不満で脱退する人も少くない。そんな小事に拘泥して全体を見失っては、キブツは見えない。最初十人か二十人を出発したキブツが、二十年、三十年経過するうちに、五、六百人の大集団になっているキブツの本質を窮めることが、キブツ研修の意義であらう。個人主義、個別対立、利潤追求に無我夢中の日本から、キブツに行つてキブツをみることは、謙虚な気持だけが武器でしょう。皆さんは西行法師の巡礼姿を乞食坊主と見損じないで下さい。

新しい本の紹介

私の中の王国 満江玲子

イギリス人の家に住み込んで、家事を手伝いながら学校へかよって……
恵まれたオーペア生活を送った一女性
性の花咲ける青春譜（あすなろ社）

¥620

〒110

看護婦さん募集

ユニークな長崎共同生活体の医療部門・藤田外科医院で看護婦さんを募集しています。現在、院長のほか若い医師二名、看護婦六名、他に検査技師の学校に通っている男子一名がそのメンバー。従来の企業化された病院でなく、本来あるところのホスピタル（優遇する心）の意味を実現しようとしている。資格がなくとも学校に行く意志があれば可。お問い合わせは左へ。

長崎市小ヶ倉町一―六四〇

〒八五〇

藤田外科医院
藤田満寿子

電話 〇九五八―七八一五―一〇一